

# 暴力についての大学生の意識

重松 克也\*

## How is the University's students conscious of the Violence ?

### 1. 本稿の課題

社会科の学習は学習者を取り巻く社会的な状況や思潮の中で、意味づけ直される（村井淳志 1996）。今日、自己責任・自己選択に基づく競争社会の中で、しかもその競争が社会的な階層性に規定されている（刈谷剛彦 2001、本田由紀 2011 等）中で、学習者は自らをどのような立ち位置に据え、社会をとらえているのか。それが本稿の問題関心である。

そうした問題関心に基づき、本稿では、大学生が学力競争と「男性性」とを巡っていかなる暴力性を自明視しているかについての意識調査に対する分析や考察に取り組む。大学生を対象とするのは今現在社会科を履修している者よりも、学力競争において一定の結果を経ているので、その競争の受容度合いが明確だと考えたからである。また「男性性」に着目するのは、社会哲学者ジェームス ギリガン Gilligan, J. : 1997 の知見に多く負っている。ギリガンによれば、近現代社会における社会的排除を含め暴力性は近代的な家父長制的なイデオロギーに規定され、disregarded な（自己肯定感を低める）経験、及びプライドを傷つけられ恥じる shamed（メンツが立たない）出来事によって他者を排除したり攻撃したりする。

ギリガンの見解を踏まえれば、解明されるべき課題は次のようになる。つまり、学力競争の中で、青少年特に男性は日々、“メンツが立たない”出来事にさらされ、自らのメンツが立たないのではないかと怯え、それを覆い隠すための暴力を自明視しているのではないか。またどのような場合に暴力を容認するのかは、競争において一定の成果を持った者とそうではない者とは異なっているのではないか。

なお、本稿では紙数の関係で、学力競争で輪切りされた階層毎の暴力肯定における様相等の特徴についての素描に限定する。

### 2. 調査の概要

本調査は筆者が参加した意識調査（代表者佐藤和夫 科研費共同研究「男女共同参画社会における男性の『社会化』と暴力性」\*\*）である。全サンプル数 1994、対象校は関東地方の国公立大学 7 校である。

#### 2-1. フェイスシート

調査時期：2008 年 6 月～7 月実施。

調査対象：表 1-1、1-2 に記載。

#### 2-2. 調査項目

調査項目は①悩み事の相談相手等の親密圏に関する項目、②学校や家庭での生活に関する項目（成績へのとらわれ、家事労働への積極性、自己肯定感）、

表 1-1 フェイスシート：大学名

| 大学名    | 男性   | 女性  | 無回答<br>・その他 | 合計   | (全体)% |
|--------|------|-----|-------------|------|-------|
| 亜細亜大学  | 46   | 23  | 1           | 70   | 3.5   |
| 一橋大学   | 94   | 98  | 1           | 192  | 9.7   |
| 横浜国立大学 | 36   | 45  | 0           | 81   | 4.1   |
| 関東学院大学 | 125  | 25  | 4           | 150  | 7.7   |
| 千葉大学   | 625  | 514 | 16          | 1155 | 57.9  |
| 東京大学   | 99   | 41  | 1           | 140  | 7.1   |
| 都留文科大学 | 73   | 127 | 0           | 200  | 10.0  |
| 合計     | 1098 | 873 | 23          | 1994 | 100.0 |

\* 学校教育課程社会科教育講座

③将来の進路やその動機に関する項目、④社会や戦争についての意識に関する項目、⑤精神的また身体的な暴力の経験に関する項目、⑥恋愛関係についての意識に関する項目、⑦属性に関する項目（家族構成、経済的状況、保護者の学歴等）である。

また分析に際して、性別と受験学力と各設問との関連について行った。受験学力では東京大学と一橋大学をAグループ、千葉大学と横浜国立大学をBグループ、その他の大学をCグループとし、3つに区分した。検定では $\chi^2$ 検定を用いて、無帰仮説の棄却は $0.05 > p$ かつ期待度数が5未満のセル数が20.0%未満とした。解析ソフトはspss16.0を使用した。

表1-2 フェイスシート：性別、年齢、学年、所属学部

| 性別  |              |      |           |           | 学年  |              |      |           |           |
|-----|--------------|------|-----------|-----------|-----|--------------|------|-----------|-----------|
| No. | カテゴリ         | 件数   | (全体)<br>% | (除無)<br>% | No. | カテゴリ         | 件数   | (全体)<br>% | (除無)<br>% |
| 1   | 男            | 1098 | 55.1      | 55.6      | 1   | 1年生          | 876  | 43.9      | 44.4      |
| 2   | 女            | 873  | 43.8      | 44.2      | 2   | 2年生          | 527  | 26.4      | 26.7      |
| 3   | その他          | 3    | 0.2       | 0.2       | 3   | 3年生          | 421  | 21.1      | 21.3      |
|     | 無回答          | 20   | 1.0       |           | 4   | 4年生          | 134  | 6.7       | 6.8       |
|     | サンプル数 (%ベース) | 1994 | 100.0%    | 1974      | 5   | その他          | 14   | 0.7       | 0.7       |
|     |              |      |           |           |     | 無回答          | 22   | 1.1       |           |
|     |              |      |           |           |     | サンプル数 (%ベース) | 1994 | 100.0%    | 1972      |

| 年齢  |              |      |           |           | 所属学部 |              |      |        |       |
|-----|--------------|------|-----------|-----------|------|--------------|------|--------|-------|
| No. | カテゴリ         | 件数   | (全体)<br>% | (除無)<br>% | No.  | カテゴリ         | 件数   | (全体)%  | (除無)% |
| 1   | 18歳以下        | 601  | 30.1      | 30.5      | 1    | 教育学部         | 400  | 20.1   | 20.4  |
| 2   | 19歳          | 525  | 26.3      | 26.7      | 2    | 医学部          | 9    | 0.5    | 0.5   |
| 3   | 20歳          | 466  | 23.4      | 23.7      | 3    | 看護学部         | 74   | 3.7    | 3.8   |
| 4   | 21歳          | 210  | 10.5      | 10.7      | 4    | 法学部          | 223  | 11.2   | 11.4  |
| 5   | 22歳          | 73   | 3.7       | 3.7       | 5    | 理学部          | 173  | 8.7    | 8.8   |
| 6   | 23～29歳       | 77   | 3.9       | 3.9       | 6    | 工学部          | 221  | 11.1   | 11.3  |
| 7   | 30歳以上        | 16   | 0.8       | 0.8       | 7    | 経済・経営学部      | 279  | 14.0   | 14.2  |
|     | 無回答          | 26   | 1.3       |           | 8    | 農学・園芸学部      | 26   | 1.3    | 1.3   |
|     | サンプル数 (%ベース) | 1994 | 100.0%    | 1968      | 9    | 芸術学部         | 0    | 0.0    | 0.0   |
|     |              |      |           |           | 10   | 文学部          | 271  | 13.6   | 13.8  |
|     |              |      |           |           | 11   | その他          | 287  | 14.4   | 14.6  |
|     |              |      |           |           |      | 無回答          | 31   | 1.6    |       |
|     |              |      |           |           |      | サンプル数 (%ベース) | 1994 | 100.0% | 1963  |

### 1 競争への囚われや社会的有用性

「他人の成績を気にしてしまうか」という設問で、受験における競争への囚われを調べた。回答ではそう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、全くそう思わないの4段階を設定した。分析において、

そう思うとややそう思うを「思う」に、あまりそう思わないと全くそう思わないを「思わない」として集計した（「思う」、「思わない」の表記は以下同様）。

表2 成績への関心\_\_性別

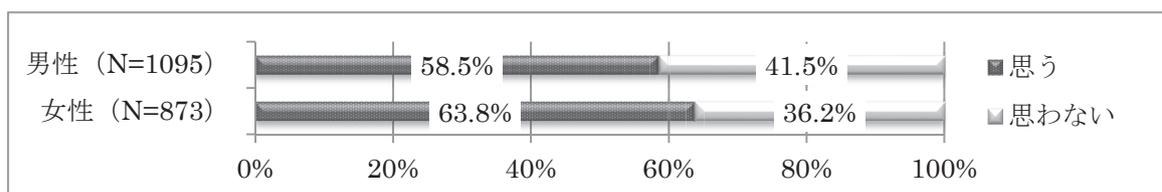
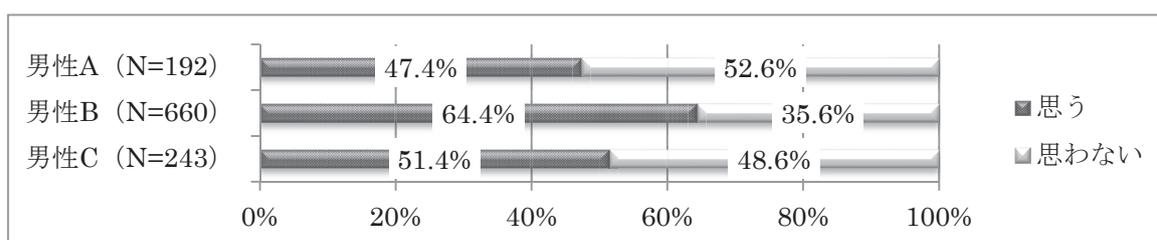


表3 成績への関心\_\_男性と受験学力グループ別



他人の成績を気にする者の割合は女性の方が多い（表2）が、彼女達の受験学力グループ別の集計結果では有意な差がなかった（各グループで「思う」が約40%前後）。女性は受験学力の到達度に関わらず、人の成績を気にしてしまう者が一様に分散しているのである。一方、男性は受験学力グループ別（表3）で顕著な偏りがみられた。多い順に並べると、中位層（64.4%）、下位層（51.4%）、上位層（47.4%）であった。男性では上位層や下位層よりも中位層が学力競争における他人との比較に敏感であった。上位層の男性が他人の成績を気にしないのは、彼らが一定レベル以上の学力を獲得しているためと推測される。下位層の男性が他人の成績を気にしないのは学力競争に自己有用性を求めることができないからか、あるいはもともと学力による競争自体に強い関心がないためか等の理由が推測される。

つまり男性はその中位が示した特徴のように、一定程度以上の学力に達するかもしれないが現実にはそうではない層において、他者との比較・競争にとらわれているのである。そこにおいて自らのメンツを保とうとしているのだろう。では、男性の下位層は学力競争以外の何に自らのメンツを保とうとしているのであろうか。男性の上位層や中位層と顕著な差がでた設問が「スポーツが苦手だ」であった。

表4 スポーツの苦手さ\_\_性別

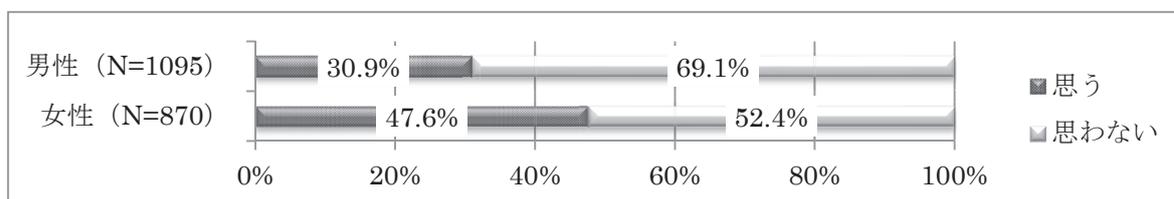
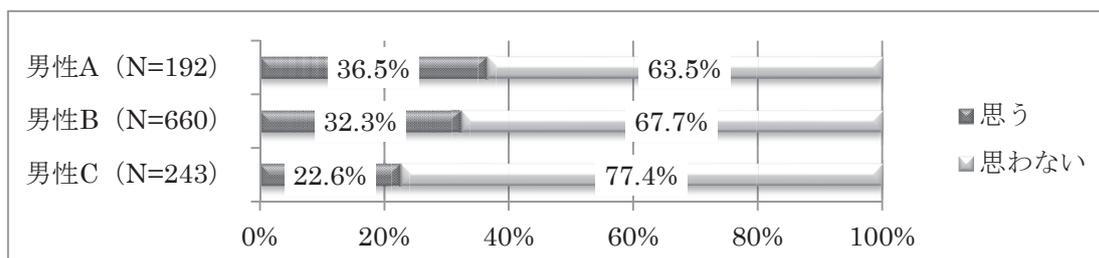


表5 スポーツの苦手さ\_\_男性と受験学力グループ



男性の方が、スポーツが苦手だと認識している者が少ない結果となった。調査対象に偏りがあるとも

推測されるが、それにしても男性の3割しかスポーツが苦手だと思っていないのである。男らしさを保つために不得意とする基準が低く設定されているのか、またスポーツができる自分であると思いたいという願望も入り込んでいるか等の理由が推測される。男性を受験学力グループ別にみると（表7）、下位層で2割程しか（22.6%）苦手だと思っていないのが顕著である。スポーツにおける自己優位性を気にかけているように見える（女性は各グループで「思う」が47%前後。有意な差はない）。

さて、一般的に、競争がもたらす弊害として、競争自体を自明視して自己や他者を振り分けるメンタリティの増幅につながるといえるが、実際どうであろうか。設問「世の中には役に立たない人間がいると思うか」の結果をみていく。

表6 社会的有用性\_\_性別

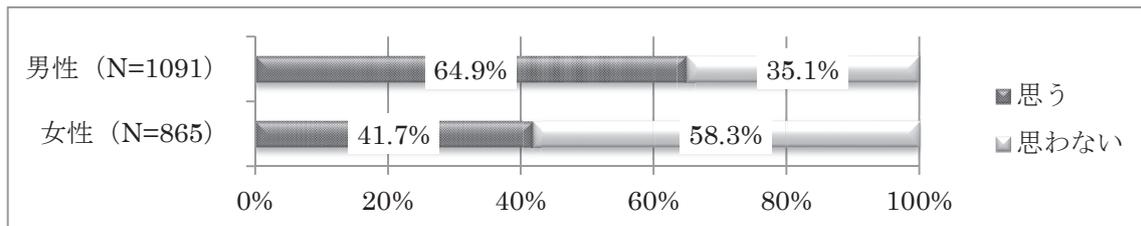


表7 社会的有用性\_\_男性と受験学力グループ

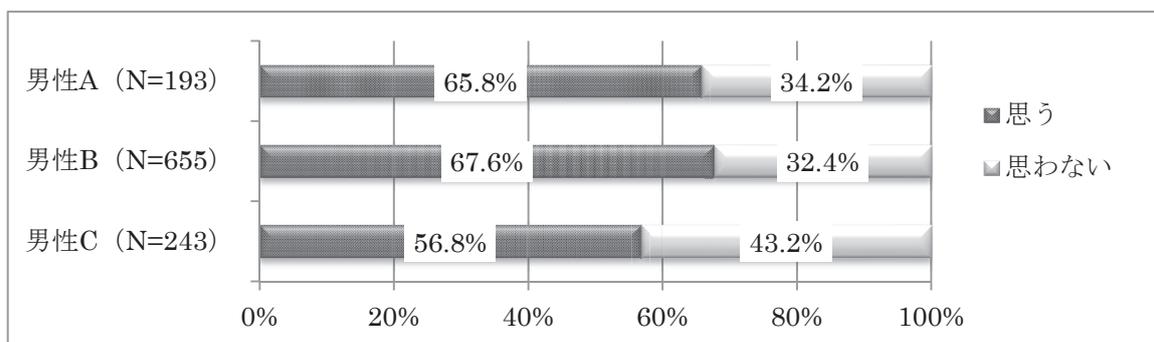


表6をみると、男性の方が社会的に役に立たない者がいるととらえている割合が多い。これまでの結果（表2）と勘案すると、女性よりも競争にとらわれていない男性の方が役に立たない者がいると思う者の割合が多いのである。これはどういうことか。そこで男性を受験学力グループ別にみると（表7）、中位層が一番多く、ついで上位層、やや離れて下位層となっている（女性は各グループで「思う」が約40%前後、有意な差はない）。中位層は学力競争に、下位層は身体的な能力での優位性にそれぞれ囚われていることで社会的な有用性による人の評価を自明視すると思われるが、上位層はそれらがあてはまらない。上位層の競争はどこでなされているのかについて分析し、他の層も含めてどのような暴力性を自明視するのか。更に分析をすすめることとしたい。

## 2. 社会を制御する志向

「社会を変えるのに大きな力をもつのは経済界だと思う」という設問から分析を始める。

表8 社会を変革する要因（経済）\_\_性別

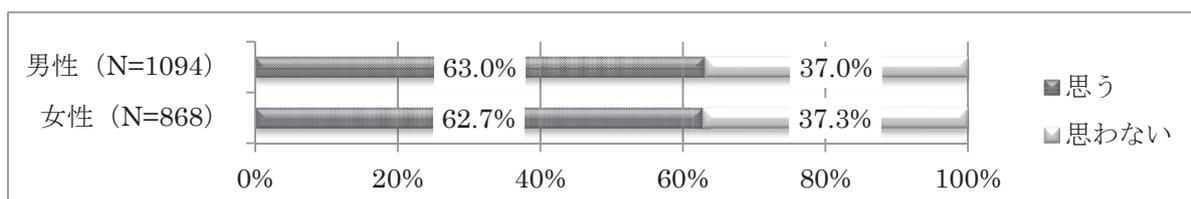


表9 社会を変革する要因（経済）\_\_男性と受験学力グループ

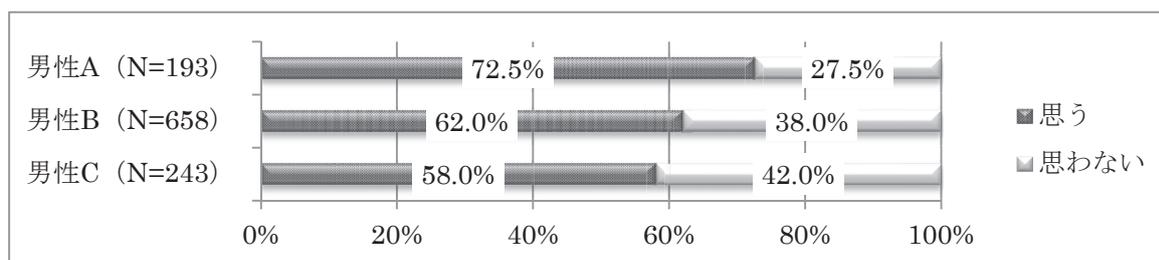


表8からわかるように、性別における顕著な差はなく、それぞれ6割ほどの者が経済界の動向が社会を変化させる要因であるとの認識を持っている。男性を受験学力グループ別の結果（表9）でみると、ここでも男性において顕著な差が生じた（女性は各グループで「思う」が約62%前後で、有意な差はない）。また上位層（72.5%）と下位層（58.0%）との差が著しい。なぜ男性の上位層に「思う」の割合が多いのか。その分析は次の設問（「政治・経済を大きく動かす仕事に就きたいか」）の回答結果と関連づけておこなうこととする。

表10 卒業後の進路\_\_性別

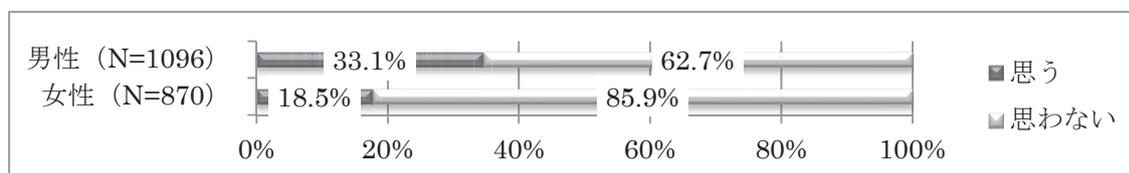


表11 卒業後の進路\_\_男性と受験学力グループ

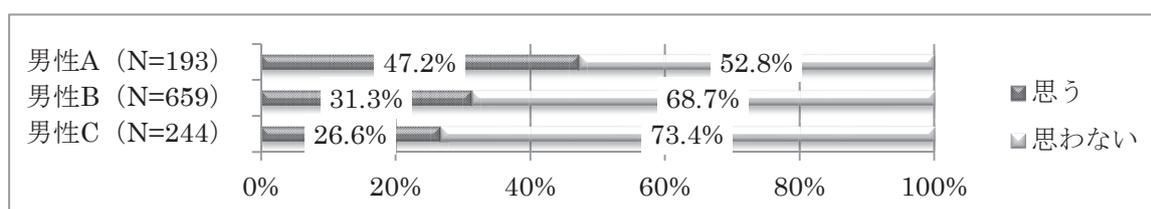


表12 卒業後の進路\_\_女性と受験学力グループ

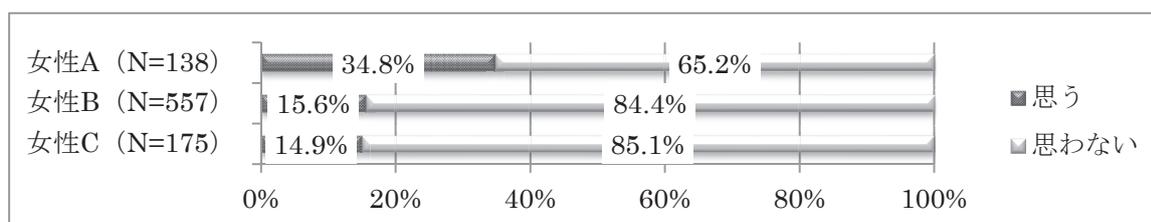


表10から男性の方（33.1%）が女性（18.5%）の約1.8倍も多く、政治経済を動かす仕事に就きたいと回答した。また男性の受験学力グループ別の結果（表11）では、上位層の約半分近くが「思う」と回答したのが特徴的である（47.2%）。そうした上位層の特徴が更に顕著だったのは女性でも同様であった。女性の受験学力グループ別の結果（表12）では、男性以上に上位層（34.8%）で際立っており、中位層（15.6%）や下位層（14.9%）と比較すると、約2倍以上の者が「思う」と回答した。

つまり、表8から表12の結果をみると、男性は女性よりも自分自身を政治や経済を大きく変化させる仕事に就きたいと考えているのである。特にその傾向は男女共に受験学力グループの上位層にみられる。受験競争が形成したエリート意識の反映ともいえるが、自身の進路と結びつかないと社会の変化を主体的に促す意欲をもたない傾向は、社会科教育にとって看過しえない課題である。

考えてみれば、社会を客観的構造的に認識し、社会の改善を図ろうとするのはそれが実現可能だととらえていることが大きな要件である。その要件が自らの進路選択によって影響されているのであれば、

社会科は学習者の自己実現のあり方と関連づけて取り組む必要がある。

やや結論を急ぎすぎた。暴力性の様相についての分析へ進むこととし、次に戦争観についての設問をみていく。

### 3. 戦争観

「国家を守る手段として戦争をすることもやむをえない場合もある」の結果は次の通りであった。

表 13 戦争観①\_\_性別

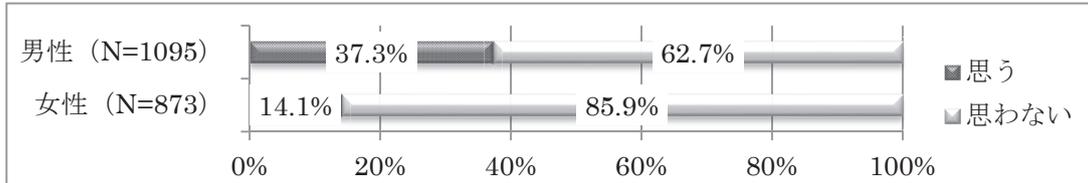


表 14 戦争観①\_\_男性と受験学力グループ

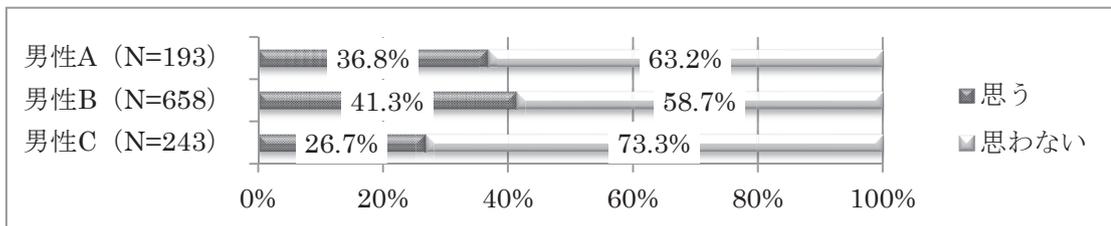


表 15 戦争観①\_\_女性と受験学力グループ

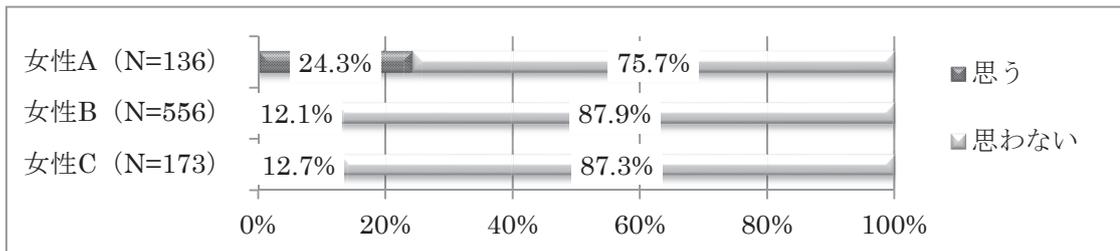


表 13 をみると、男性の方が国家を守るために戦争を肯定している割合が多い。男性を受験学力グループ別（表 14）にみると、上位層・中位層と下位層とで大きな差がみられる。女性の受験学力グループ別（表 15）では顕著に上位層のみが国家を守るための戦争肯定の割合が多い。社会を変化させたい（表 11、12）とする上位層の男女ともに、国家を守る戦争をやむなしとする者が顕著に多いのである。また表 14 に再び目を転じると、中位層の男性で国家を守るための戦争をやむなしとする者が多いがわかる。学力競争に囚われ社会的な有用性による人の評価を自明視する傾向が強い中位層の男性が既成の社会的な制度や動向を受け入れる傾向にあると思われる。

それでは、男女共に「思わない」が多かった下位層が非暴力を強く求めているのかということ、次の設問結果（「家族を守るために戦争をすることもやむをえない場合もある」）からそうではないことがわかる。

表 16 戦争観②\_\_性別

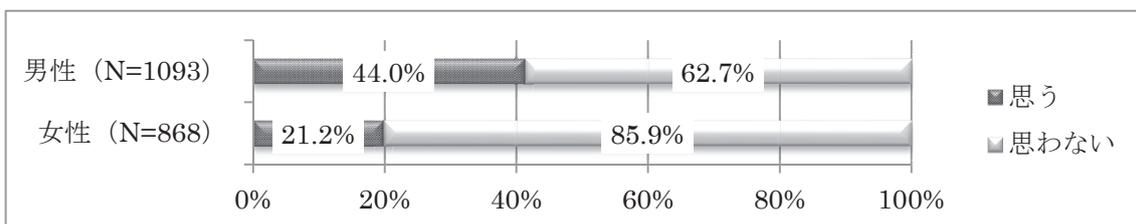


表 17 戦争観②\_\_男性と受験学力グループ

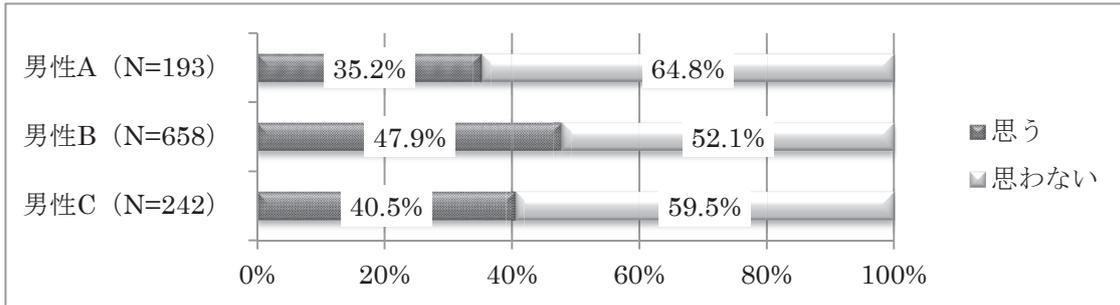


表 16 から男性は女性の 2 倍も多く、家族を守るための戦争を肯定している結果となった。男性の受験学力グループ別（表 17）では、家族を守るための戦争肯定は中位層が一番多く、次いで下位層、上位層の順となった（女性は各グループで「思う」が 20% 前後で、優位な差はない）。

つまり女性全般は受験学力の到達度に関わらず、戦争になると家族を守れないという事実認識ゆえか、あるいは国家や家族を守るためという理由からでは戦争を肯定しない傾向が強い。男性は上位層では国家を守るための戦争は肯定するが、家族を守るためという理由からは肯定しない。おそらく家族を守ることが戦時体制下において困難を極めるとの客観的な事実認識に基づくのであろう。男性の中位層では、国家また家族を守るための戦争を肯定しているのである。ここでもステレオタイプの戦争肯定観を自明視している傾向がみられた。

男性の下位層では国家よりも家族のためという理由で戦争を肯定する傾向にある。戦争が歴史的に国家体制の保持のためにおこなわれてきたことや家族を守ることが戦時下において究極的に保障されないという事実認識がやや弱いのではないだろうか。

では、社会を大きく変化させる仕事に就きたいとする受験学力の上位層は今後、いったんそのルートから外れたならば、国家を守るためにと戦争を肯定するだろうか。次の設問（「戦争は社会の底辺層の人々にチャンスを与えると思う」）についてみていく。

表 18 戦争観③\_\_性別

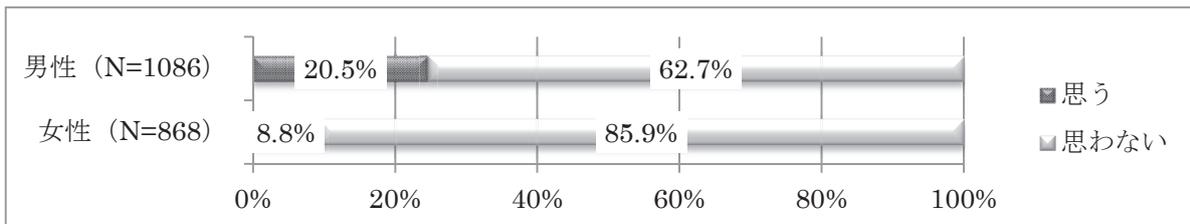


表 19 戦争観③\_\_男性と受験学力グループ

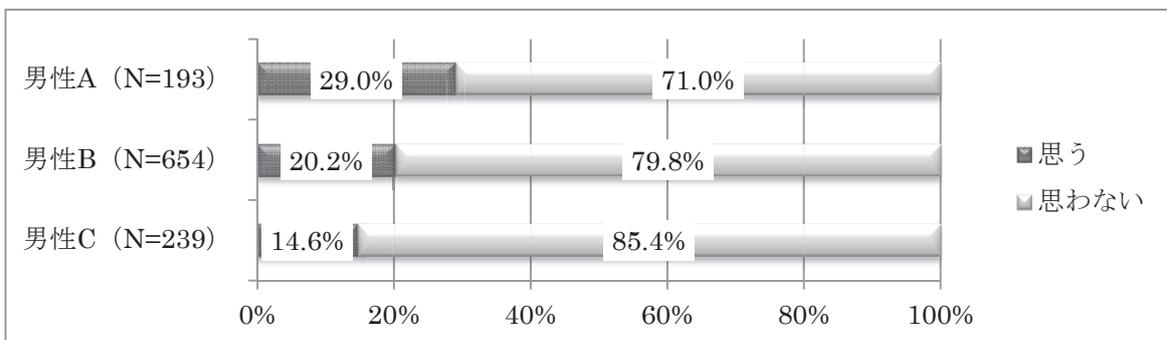


表 20 戦争観③\_\_女性と受験学力グループ

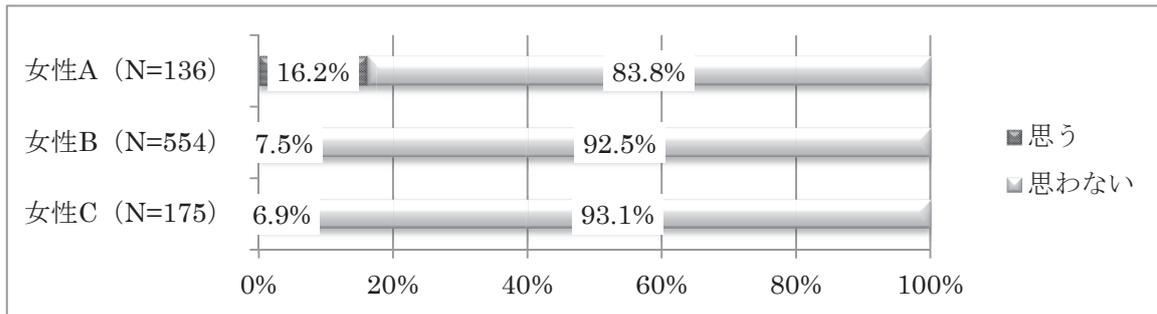


表 18 から、男性は女性よりも、戦争によって既存の社会システムが壊れ、社会の最低辺層にチャンスが訪れるととらえる傾向にあることがわかる。男性の受験学力グループ別（表 19）では、評価基準の転換として認識する者の多さの並び順は受験学力の序列そのものとなった。女性の受験学力グループ別（表 20）では、上位層が突出している結果となった。つまり将来、自分は社会をコントロールする・できると自認する者達は既存の社会制度を根底から変える装置として、戦争を認識する傾向が強いのである。それは自身が競争に勝ち抜けなかった場合、自身の敗者復活を賭けて戦争を肯定することとなる。

#### 4. まとめ

女子学生は受験学力の修得度に関わらず、その競争に取り込まれている者が分散していた。一方、男子学生は受験学力の修得度によって、学力競争への取り込まれ方が異なっていた。一定レベル以上の受験学力を習得できるかどうかといういわばボーダーラインにいる者ほど、その競争に過敏であった。

また、男子学生で受験学力が一定以上のレベルに達した者はその競争にさほど過敏でないものの、社会の変化を生じさせる仕事につける・就くと考え、かつ国家を守るための戦争肯定が多かった。また自身が競争からふり落とされ社会的な排除を被った場合、社会制度そのものを根本的に改変する契機として戦争肯定へ転じる層が多いと推測された。受験学力上位層の女子学生も同層の男子学生と同様に、自身の進路選択と社会制度の変化を生じさせる意欲や関心とが強く結びつき、また国家を守るための戦争肯定派や社会制度の破壊としての戦争認識をもつ者が多かった。ただ上位層の男子学生との相違点としては、社会的な有用性から人を判断する者はさほど多くはなかった。しかしながら受験学力上層の男女の共通点として何よりも注目したいのは、自身が競争に勝ち抜けなかった場合、既存の社会制度を壊す装置として戦争をとらえる傾向にあったことである。つまり、この層の特徴として国家や社会の制御を通して自己の有用性を保持しようとする傾向が挙げられる。

受験学力下位層の男性は成績で他者と競争することへの関心が低い一方で、身体的な能力が高いと自己認識していた。また家族を守るための戦争を肯定する者も多かった。上位層とは異なり、身近な空間をコントロールしようとする傾向にあるといえる。

受験学力中位層の男子大学生はそうした上位層と下位層それぞれの傾向が混在しているが、特徴的なのは一番、学力競争に囚われており、かつ社会的な有用性から人を判断していたことである。

つまり総じて、承認欲求に基づく暴力（他者や社会の自己目的的な制御）を自明視する層が競争のルートに乗っている場合は国家の制度保持という理由から戦争（暴力）を容認し、ルートから外れた場合には自身の敗者復活を図る暴力へ進む危険性をはらんでいたのである。一方、学力競争での勝ち残りにあまり関心を向けない者たちの中には、家族を戦争で守れるという素朴な認識を持っている点も問題視される。特にそうした傾向が男子学生に顕著に現れていたのである。

それらの結果は社会科に対して何を突きつけているのか。学習者の競争における自己肯定感や自尊感情のあり方を不問にしたままに、客観的構造的な認識の育成や心情的な暴力否定等にとどまる限り、承

認欲求に基づく暴力の肯定に抗いえないだろう。その克服の方途として、例えば、近現代史学習では、国家や社会の人材輩出としての学校が果たしてきた機能をマッチョイズムと近現代社会の形成との関連からとらえさせ、当時の青少年がどのようなアイデンティティを獲得されてきたのかについて探究させることも必要かもしれない。また、授業構成では学習者の階層的な社会認識の特徴を踏まえる必要があろう。例えば、戦争に関する学習では、家族を守るとは何か、国家を守るとは何か等を客観的構造的に探究させる配慮が必要だろう。

そうした研究や実践はこれまでまったくなかったわけではない。だが、いわば能力の利己的な使用が当然視されている今日、これまで以上に社会科内容構成や教材開発、授業づくりの全面的な改善が求められているのである。

最後に本稿の課題を記しておく。本稿が用いた調査では、家族の収入額、保護者の学歴等やいじめられた体験の有無等も問うている。それらの集計結果を用いて、競争に規定された自己有用性の様相や競争容認に向かう契機等についての分析や考察を詳細におこなう課題が残された。

#### 【参考文献】

Gilligan:1997 *Violence: Reflections on a National Epidemic*, Vintage.

刈谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機-不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・バインド)へ』 有信堂高文社

本田由紀 2011 『学校の「空気」(若者の気分)』 岩波書店

村井淳志 1996 『学力から意味へ 安井・本多・久津見・鈴木各教室の元生徒からの聞き取りから』 草木文化社

---

\*\* 同研究は 2006 年から 2008 年にかけて行われ、男女共同参画社会の形成に不可欠な課題である「男性の社会化と暴力性」との問題をヨーロッパおよびアメリカ合衆国の研究と施策についての比較研究調査を通して日本における男性の暴力の特性を明らかにし、その予防策を学校教育から社会教育にまで広めて研究しかつ調査した。その上で、先進諸国における男性の暴力性の関する原理的問題を解明した。研究に参加した者は次の通り。池谷壽夫、汐見稔幸、宮本みち子、折出建二、杉田聡、片岡洋子、山田綾、小玉亮子、重松克也、岩谷良恵、高橋在也、渡辺大輔、湯川やよい。